

つづはら 廿原のいちご

集落に賑わいもたらした
観光農園
「おいしい」を励みに
日々、奔走



有限会社 廿原ええのお

豊かな自然と変化に富んだ気候に育まれる岐阜県の農産物と生産農家を紹介するシリーズの11回目は多治見市廿原町のイチゴです。廿原町は地区の人口が150人足らずの静かな山間の集落。そこへ年間約3万人の人が訪れます。お目当ては観光農園「廿原ええのお」のイチゴやブルーベリー。12月からイチゴ狩りのシーズンが始まり、温かなハウスの中には瑞々しい「廿原のいちご」が実ります。甘くて粒が大きいと評判の「廿原のいちご」を地域の名物にまで育て上げた廿原ええのお話を聞きました。



廿原のいちご栽培に携わるみなさん(左から恒岡和希さん、山田照次さん、山田晃さん、川村武弘さん)

整備事業を活用し営農組織設立 イチゴが人気呼び経営が軌道に

「廿原ええのおは、平成10年に50軒の集落の内、38人の農家全員が株主となり設立されました。農地を集約して一括営農をする。営農と、いいね、の方言。ええのおの懸詞が名前の由来です」と有限会社廿原ええのお代表取締役、山田照次さん。現在、イチゴのハウスは13棟。観光農園では「章姫」を、直売用には果肉が固めで輸送に適している「紅ほっぺ」を栽培しています。

「この辺りは美濃焼の窯焚きを使う木炭づくりで生計をたてていたところ、農業をいっても自分の家で食べるものを作る程度。会社設立前の平成9年ごろは、農地の半分以上は耕作放棄地のような状態でした。そこで県営農村活性化住環境整備事業を活用して、営農組織を設立。農地の集積と農作業の効率化を図るだけでなく、農業公園や下水道、集落排水設備など20ヘクタールの整備を行いました。新規作物の候補として上がったのがイチゴ。JAが行っていたイチゴの巡回研修に参加して、まず10アールのハウスでスタート。2年後には15アールのハウスを増設しました。」

収穫が追いつかない！ 苦肉の策で始めた観光農園

平成17年からはブルーベリーの観光農園をオープン。観光農園を始めたきっかけは、言ってみれば苦肉の策。苦し紛れの思いつきからでした。

「平成14年当時、ブルーベリー栽培が話題だったので、2000本の苗を買って栽培を始めました。3年くらいして実がつかはじ、いざ収穫しようとして気づいたのが、ブルーベリーは収穫が一番大変なことです。一粒ずつ熟す時期が違うので、2000本のブルーベリーを収穫しようすると20人くらいパートさんが必要です。えらいごちゃごちゃという話になり、急遽観光農園にしてお客様に摘み取ってもらったのです。」



代表取締役の山田照次さん



高設ベンチ栽培は作業もしやすい

「廿原のいちご」栽培は高設ベンチ方式を採用。養液栽培にすることで作業しやすく水分や肥料がコントロールしやすい上、小さなお子さんにも摘みやすいと好評です。

栽培の一番の苦労は「12月1日にオープンして5月中旬までの約半年間、安定して実が熟している状態にして

すると、初めての年にも関わらず約1000人のお客様が来場。これには「僕らもびっくりしました」と山田さん。山間地にお客さんが来てくれる、モノが売れるとは全く考えていなかったからです。

本広告に関するご意見やご感想をお聞かせください。抽選で「生きのいっぱい！耕さない田んぼのお米と多治見のイチゴ・ブルーベリージャム」をプレゼント！

抽選で5名様様にプレゼント

(写真はイメージ)

栽培品種はコシヒカリを使い、冬期湛水・不耕栽培で農業を全く使わない方法で栽培されたお米です。自然の恵みをたっぷりとお楽しみください。ジャムも同じく廿原ええのおで育った果実を使用。程よい甘みが素材の味を引き立てます。

①郵便番号・住所②氏名③電話番号
④紙面に関するご意見を明記して下記の方法でお申し込みください。
【はがき】500-8577(住所不要)
岐阜新聞 営業局
「ぎふの農業人」係

1月18日(金) 必着

※個人情報等は賞品発送において使用し、適宜に管理します。
※当選者の発表は、賞品の発送(翌月予定)をもってさせていただきます。

農の現場から/JAとうと経済部課長 山田好彦さん

JAとうとは「地域の農業と環境を守り、地域に貢献できる組合運動を展開する」という経営方針により、地元の農業の実情に応じた、営農支援や担い手の育成支援に取り組んでいます。また、安心、安全な農産物の提供、信頼を得るため各生産物の残留農薬検査や土壌診断などを実施するとともに、地元農産物を活用した6次産業化への取り組みも積極的に支援しています。



耕そう、大地と地域の未来。



頬張ればみんな笑顔
甘くて大粒のイチゴ
環境を守りながら育てる

生産者のこだわりが詰まった逸品を届けたい
地域の一員として地域の未来を見守るJA